

平成30年白老町議会総務文教常任委員会会議録

平成30年 5月 9日（水曜日）

開 会 午前10時00分

閉 会 午後 0時05分

○会議に付した事件

所管事務調査

1. 循環型の地域社会づくりの現状と課題
-

○出席委員（7名）

委員長	小西秀延君	副委員長	及川保君
委員	大淵紀夫君	委員	吉田和子君
委員	吉谷一孝君	委員	前田博之君
委員	西田祐子君		

○欠席委員（なし）

○説明のために出席した者の職氏名

生活環境課長	本間力君
生活環境課主幹	後藤田久雄君
生活環境統括主任	今村吉生君

○職務のため出席した事務局職員

事務局長	高橋裕明君
主査	小野寺修男君

◎開会の宣告

○委員長（小西秀延君） ただいまより、総務文教常任委員会を開会いたします。

（午前 10 時 00 分）

○委員長（小西秀延君） 本日の所管事務調査でございますが、循環型の地域社会づくりの現状と課題ということについて取り上げたいと思います。それでは担当課から説明を受けたいと思います。

本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 循環型地域社会づくりの現状と課題ということで、本日白老町におけるリサイクルの状況の推移、北海道におけるリサイクルの状況の推移、また特徴ある市町村のリサイクルの状況と今後の取り組みということで、大きく 4 項目資料に沿って説明させていただきます。

白老町におけるリサイクル状況の推移でございますが、本町のリサイクル状況でございますが、国の容器包装リサイクル法、略して容リ法としていますが、それに基づきまして缶、瓶、ペットボトル、紙パック、そういった分別収集、及び白老 3 R 推進協議会の登録団体を中心に古紙の集団回収。平成 16 年からは古着、古布の回収。平成 24 年から小型家電の回収に取り組んできております。また、平成 26 年から雑紙の回収をさせていただきまして、さらには 29 年からでございますがプラスチック類の拡充により燃料ごみの回収をさせていただいております。その他、平成 12 年から本町で有料化を進めておりますが広域の中で、分類した中でセンターでも鉄系類などの取り組みも進んでおります。本日資料をご用意させていただいておりますので、後ほどに担当より資料に基づきましてご説明させていただきますが、北海道におきましては本日北海道廃棄物処理計画、リサイクルの関係かいつまみまして説明すること。また、特徴ある市町村につきましては、北海道内の順位を資料として用意しておりますので、後ほどそれらを踏まえまして説明をすることと、今後の取り組み、課題につきましては本町の基本計画に基づきまして今後説明いたしますのでよろしく願いいたします。これより担当より説明させていただきます。

○委員長（小西秀延君） 後藤田生活環境課主幹。

○生活環境課主幹（後藤田久雄君） 私のほうから資料を説明させていただきます。資料の添付ですけれども、資料 1 と書いたものと 2 番目に資料 1-1、資料 1-2、資料 1-3、資料 1-4、資料 2 と資料 2-1 が全部そろって揃っているでしょうか。あと、添付書類としまして北海道廃棄物処理計画（第 4 次）と白老町のごみ処理基本計画が皆さんに届いているかと思いますので、それに沿って説明をさせていただきます。

まず、1 番目の白老町におけるリサイクル状況と推移についてでございますが、本町におけるリサイクルの状況は環境衛生センターに回収された鉄系類、資源ごみとして回収された瓶類、缶類、ペットボトル、集団回収による古紙、拠点回収による古着、古布、小型家電の回収の推移について資料 1 から 1-4 のとおりとなっております。まず資料 1 についてですけれども、平成 20 年度から

平成 28 年度までのリサイクル率を上げております。その中で平成 21 年から 25 年度については燃料化施設による固形燃料化でリサイクル率が高くなっております。ちなみに 25 年度は確か全道で一番となつてございます。その後固形化がなくなって現在 28 年度で 19.45% になっていますが、資料 2-1 に 28 年度の道内 179 市町村の順位を載せてございます。この中に 134 番目に白老町載っていますが、リサイクル率 15.9% になっています。資料 1 に 28 年度の白老町で出しているのが 19.45%。これにつきましては、一般廃棄物の実態調査がございまして、その調査に基づく資料 2-1 が結果で、この中で余剰生成物、燃料化施設でつくったものが含まれていないので数字が少なくなっているということで、余剰生成物を含めるとうちでカウントしているのは 19.45%。これが 28 年度の廃棄物の実態調査とうちの数値との違いとなります。ちなみに 19.45% といいますと、28 年度でいきますとちょうど 112 番目くらいになるかと思えます。

続きまして、資料 1-1 について説明させていただきます。こちらのほうには鉄系類の平成 22 年から 29 年度までの引き渡し量が年平均 37 トン。売却額が 73 万 9,000 円でございます。その下の資源ごみの回収実績につきましては、20 年度から 29 年度までで瓶類が平均 121 トン、缶類が 86 トン、ペットボトルが 68 トンとなっておりますが、ペットボトルにつきましては平成 21 年度より燃料化施設で処理されているという状況になっております。燃料ごみの回収実績でございますが、こちらについては 26 年度から雑紙という形で実施され昨年度よりプラスチック容器類、弁当の蓋などのものが追加されたことになって実績的にはふえているよう状況となっております。

その裏に資料 1-2、こちらにつきましては、3R 推進協議会の登録団体の集団回収による古紙回収量の推移でございます。こちらにつきましては、19 年度から 29 年度までの新聞紙が 254 トン、ダンボールで 160 トン、雑誌類 83 トン、古紙全体としましては年平均 497 トンとなっております。

続きまして、資料 1-3、こちらにつきましては、古布、古着のリサイクルの状況で平成 25 年度より町で直接回収を実施しております。回収ボックスにつきましては、平成 25 年度が役場、いきいき 4・6、役場萩野出張所、竹浦出張所、虎杖浜出張所、環境衛生センターの 6 カ所で、平成 26 年度から白老コミュニティーセンターを追加し現在の 7 カ所で回収設置している状況となっております。

資料 1-4、その裏にありますけれども、こちらにつきましては小型家電の回収実績で平成 24 年度に役場と白老コミュニティーセンターの 2 カ所で回収ボックスを設置してございます。平成 25 年度にいきいき 4・6 と環境衛生センターの 2 カ所を追加し、29 年度、昨年といたしましてもことしの 3 月に竹浦出張所のほうにも設置して現在 5 カ所で回収している状況です。

続きまして、2 番目の北海道におけるリサイクルの状況と推移についてでございます。こちらにつきましては、資料 2 の北海道と書いているところでございますけれども、19 年度から 28 年度までのリサイクル率で、北海道としましては平成 21 年度から全国の平均を上回って徐々に増加しているような状況になってございます。

続きまして、資料 2-1 と 2-2 関係ですけれども、こちらにつきましては先ほど言いましたけれども、平成 28 年度の一般廃棄物の実態調査というものからの数字でございます。北海道 179 市町村の平成 28 年度のリサイクル率の順位については資料 2-1 のほうでございますが、白老町が 134

位となっております。また2のほうで北海道の市町村の人口、白老町の同規模ということで1万5,000人から3万人規模の市町村の順位でございます。この中で白老町は22位ということになります。真ん中に胆振管内の市町村ということで上げてございますが、白老町が9番目となっております。

別添の3ページ北海道廃棄物処理計画、第4次の中の第2章、廃棄物の将来予測ということで表1に1人1日当たりのごみの排出量という形で推移を全国と比較して記載してございます。

続きまして、6ページの第3章、目標及び施策展開の基本的考え方ということで、適正処理に関する目標で一般廃棄物のリサイクル率として平成31年、これも一番下になるのですけれども平成31年を目標を北海道といたしましては30%以上と設定しております。

9ページ目に第4章として各主体の役割という形で道民、10ページ目に事業者、12ページ目に道、13ページ目に市町村の役割が記載されてございます。

15ページ目、第5章の一般廃棄物の処理に関する方針ということで、2番目のごみの適正な循環の利用で現状と課題、基本的な方向ということで、こちらは17ページになりますが平成31年度の目標という形で載せてございます。以上で2番目の説明は終わります。

3番目、特徴ある市町村におけるリサイクルの状況でございますが、こちらについては特に資料等はございませんが、先ほど資料2-1で全道の28年度の順位を見てもらったのですが、上位のほうについてはほとんどが生ごみの堆肥化、これを実施されている市町村が上位になっているという状況でございます。特に豊浦町は26年度くらいまでは下位のほうにいたのですけれども、堆肥化施設で生ごみの堆肥化ということを実施して28年度には一番になった状況でございます。

続きまして、4番目の今後の取り組み（課題と展望）でございますけれども、こちらにつきましては別添の白老町のごみ処理基本計画、こちらから説明をしていきたいと思っております。8ページ、第2章、ごみ処理の現状と課題ということでごみの減量・リサイクルの現状として資源ごみの分別収集、この中で現状と課題が載っております。9ページにつきましては、集団回収、拠点回収の現状と課題。10ページにはごみの減量の現状と課題が記載されております。16ページで、第3章の基本方針及び目標ということで、基本方針①としてごみの減量・リサイクルの意識啓発。基本方針②としてごみの減量。17ページに基本方針③としてリサイクル。基本方針④として適正なごみ処理が記載されております。18ページには目標年次、26年度から35年までの10年間の計画期間ということで示されております。その下に(2)、事業者・行政・町民の役割ということで書いてございます。27ページになりますが、こちらのほうに白老町のリサイクル率の目標ということで、平成31年度までに平成15年なみの19%。平成35年度までに北海道の目標値である30%としてございます。

28ページですけれども、第4章の目標達成に向けた取り組みとして、これ以降に目標の達成に必要な取り組みを今後効果的、効率的に推進することで循環型社会の形成を図っていきたいということになっております。以上で資料の説明を終わります。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 資料の説明をいたしました。特にリサイクル率の向上におきましては、本日のタイトルのとおり循環型社会形成ということに大きくつながってきますし、これら分別の方法、各地域、先ほども言われたとおり生ごみの堆肥化などが大きくはウエートが持っているようなところでリサイクル率が上がっていることとか、やはり分別の形体を町民と連携しながら強化しているまちが特段推移としては流れているところかと捉えております。特に計画にも記載しておりますが、積極的な広報、または出前講座等受け身の体制ではあります。そういった説明会などの充実を図りながら、不適切な排出者がいれば、そういった指導範疇を含めていろんな角度でやっていかなければならないかと思っております。特にリサイクル法から言いますと、発足当時からのごみから申し上げますと、混合ごみとして全て最終処分場から埋め立てしていたその時代の流れから6割近いのが包装類の分別が成されて最終処分場の延命化であったり、ごみの減量化ということで平成9年からスタートされているところであります。その背景は引き続き継承していくのが身の丈としては一番大事なところだと思っておりますので、本町としても廃棄物処理につきましてはいろいろ燃料化施設含めて問題等はございますが、まず住民理解を得ながらこういった徹底を着実に進めていきたいと思っておりますので引き続きよろしく願いいたします。

○委員長（小西秀延君） 説明をいただきましたが、課題の1番目、白老町におけるリサイクルの状況と推移について、この件に関しましてご質問のあります方はどうぞ。

西田委員。

○委員（西田祐子君） 先ほどの説明の中で北海道179市町村の順位の中で上位は生ごみの堆肥化ということなのですが、白老でも以前コンポストとかやっていたけれども、現状はどういうふうになっているのでしょうか。

○委員長（小西秀延君） 後藤田生活環境課主幹。

○生活環境課主幹（後藤田久雄君） コンポストの関係ですが、資料1-2で堆肥化容器の購入助成状況という形で助成数は合計で1,498件となっておりますが、こちらについてはリサイクル率にカウントされません。なぜかという、ごみをコンポストに入れることによってその部分がカウントされないで、それでリサイクル率に影響を及ぼさないということなのです。これは、ほかの古紙とかもそうなのですが、登録団体以外で町内会単独でどこかに持って行っているとか、そういうようなものについては計量されていないのでそれが反映されていない。生協とかで紙パックを出すとかトレイとか、ああいうリサイクルはしているのですが、こちらについても計量されていないのでそれが反映されていないので、本来であればそういうものを全部拾えればもっとリサイクル率は高くなるのかと思うのですが、ちょっとその辺、数字が押さえられないということがあって、コンポストもそうなのですが、生ごみの堆肥化というのは実際皆さん家庭菜園に使っていただいているのですが、反映されていないという状況です。

○委員長（小西秀延君） 吉田委員。

○委員（吉田和子君） お話伺っていてリサイクル率というのがあるのですが、一つはごみ量を減らすことが大きな課題かと思うのです。そのためには先ほど言った生ごみの処理方法をきち

んと町民に訴えていかなければならないし、事業者もやっていくということになると思うのです。リサイクル率を向上させるということは、今やっている分別の方法を拡大していくとか、先ほど処理計画にはリサイクル率は進めていってまだ分別よくされていないというのはあるのですけれども、今出されているごみ量に対して分別されているのが19%。それを進めていくための方法をどう取っていくのかという、2つの方法をきちんとしていかなければならないのではないかと思いますので、その辺はどのようにお考えになりますか。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） ごみの減量化というのがまず最大の目標、リサイクル率を上げるイコールごみの減量化につながってくるという捉えでございます。それを推進していく上ではまず町民理解を行っていくことが最大だと思いますし、吉田委員のお話にありました分別の拡大、それも一つの方法だと思いますが、実際まちでいきますと大きく7分類で区分しているのですが、ほかのまちは11とか10とか、例えば先ほど事業者が自主的に回収している発砲トレーとか、そういうところを細かく分けていきますと、そういうものがまちとして分類に区分けしている状況でございます。現時点では燃料ごみとして近年で加えさせていただいておりますが、ご承知のとおり町民に理解をいただいて分別していく徹底というのがなかなか100%までは行ききれていないところでありますし、分別を拡大していくのもいろんな角度で議論をしながら町民に理解をいただくというのが最大だと思いますので、分別は現状を維持しつついまの分別方法を町民最大限理解していただく周知徹底をしていくということがまちとして今後も重要と捉えながら計画を推進してまいりたいと考えています。

○委員長（小西秀延君） 後藤田生活環境課主幹。

○生活環境課主幹（後藤田久雄君） 補足なのですけれども、吉田委員言われたごみ量の減ということなのですけれども、こちらについては生ごみが一番多い状態になっていますので、できるだけ生ごみの量を減らす。先ほど西田委員が言われたように、コンポストを推進するとか排出者に今後啓発をしていかなければならないのですけれども、より水切りをしてもらうことによってごみ全体の重量が減りますので、そういうことを徹底してやっていきたいと思っております。

○委員長（小西秀延君） 吉田委員。

○委員（吉田和子君） ごみ量を減らせばリサイクル率は自然と上がります。総ごみ量が減ることでもいままでやっているリサイクル率の数値が変わらなければリサイクル率は上がるということで考えていいのではないかとまい思いながら聞いていたのですけれども、苫小牧市は何年か前から有料化にして、再度電動の助成を呼びかけているということがあるので、高齢化になってくるとダンボールとかなかなか上手いかわなくて、外に土地がない人も結構いらっしゃるので電動を進めていくべきではないかと前に話したことがあるのですが、電動はあまり戸数がふえていないのではないかと思いますので、これから高齢者化に向けては電動のものが必要になってくるというのが1つと。もう一つは分別をふやしていく、その手法をきちんと考えなければいけない。前からそういう話は出ているのですけれども、高齢者にこれ以上負担をかけられないと。分別をこれ

以上進めていくと高齢者が大変な思いをするというのですけれども、この間テレビで徳島県上勝町をやっていましたけれども、あそこは本当に町内挙げてやっているのです。本当にごみは出さないという感覚で収集車もないはずなのです。だから、私も1回行ってみたいと思っているのですけれども、凄くそういうことを進めているということを含めると、分別をいかに町として知恵を絞って町民の力を借りて町民力を活かしてやっていくかということが今後大きな課題になるのではないかと考えるのが1点。もう一つは燃やせる燃料ごみ。町としていままで総ごみ量に対して燃料ごみ合計で1,683トン、平均で420トン。どれくらいまでふやせると考えていますか。出せますか。ごみ量を見てまだまだ分別をして出していない人はたくさんいると思うのです。まだまだできるのではないかとこの可能性はあるのですけれども、どこまで燃料ごみに持っていける割合というのは、どれくらいまで伸ばせそうというのは計算したり考えたことはありますか。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 分別の拡大の考え方ですけれども、吉田委員のお話のとおり、町民の理解が得られれば徹底していく。いろんな角度で知恵を絞っていくというのは重要だと考えております。廃棄物処理費全体もそうですし、分別をいかにふやすかということでごみの減量化も行いながら、かつ効率的に廃棄物処理費全体的な費用を鑑みながら進めていく。その中で分別の拡大が手法として必要な部分が見出せるような捉えは重要だと思っておりますので、今後も可能な限り考えていきたく担当課としては思っております。ただ、現状にある7分類の中を取り分け徹底していくことも重要でございますので、特に我まちとすれば家庭系の可燃ごみにつきましては登別市と広域処理を行っております。長寿命化計画に基づきますと、平成41年までとなりますし、41年以降の広域処理の中で分別の方法、より法の中で変化していくとかいろんな角度で検証していかなければいけないと捉えておりますので、まずは1つずつ着実に進めるように努力をしていきたいと思っております。燃料ごみにつきましては、手元に押さえてございませぬので大卒の話をしますと、まだまだ徹底されていない捉えが大きいということであれば家庭系でいきますと23万5,000キロですと、おそらくそれ以上には間違えなくなってくると思っておりますが、今は倍か1.5倍かという数字につきましてはお答えできないのですが、のちに資料がございましたらご提供させていただきたいと思っております。

○委員長（小西秀延君） 吉谷委員。

○委員（吉谷一孝君） 吉谷です。まずお伺いしたいのは、今までいろいろな部分でリサイクル率を上げようという努力はしてきたと認識しているのです。ただ上がってきていない、上がらない現状にあるのです。これについてまた先ほどもいろいろ意見がありましたが、細かく周知するとか細かく指導するとか、そういうことでは私はなかなかリサイクル率は上がってこないと思うのです。町民側がそれをする事によって何か意識が変わるような仕組みを作らなければ上がってこない。それは何かのメリット。たくさんやると、リサイクル率が上がると町民全体でそれが上がってくるとごみ袋の値段を下げますとかいうような、逆に言うと気持ちが変わるような周知の仕方なり方法を考えると、何かトレーにしても卵のパックにしてもいっぱい集めて何キロになったらごみ袋に

しますとか、そういう形であったりとか何か意識が変わるような。方法として先ほど言われたようなコンポストをもっと利用して生ごみを下げてくださいというような説明、皆さんが興味を持ってこういうふうにしていったら、こういうふうに私たちにいい方法が出てくるという説明の仕方をするという考え方は今あるのかなのかその辺聞かせてもらえますか。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） リサイクル率の推移については、先ほど説明したとおりで、我まちでいきますと平成 21 年以降の燃料化施設での一時的とは言いませんが大きくなった部分はございます。きちんと効率よくできていればこれは維持されていたものと捉えてございますが、その中で大きなウエートですので数字が変化していますけれども、1つ事務的なことを言いますと先ほど担当より話しましたとおり容器類、生ごみのカウントの仕方。調査等の協力が得られればきちんとコンポストで消費した量が出せると思うのですけれども、なかなか現実的には難しいところで、仮にスーパーで回収している年間のカウントがどれくらいか捉えることになれば、多少ですが容器類のカウントができる可能性はある。そういったリサイクル率の上げ方、若干上がってくる可能性はあると思うのですが、吉谷委員おっしゃるとおり意識、動機づけでいきますと例えば 2020 年でメダルをつくるために金属類を集めるというような一部の報道があるように、町民にも何か1つ意識づけになるようなことが必要だと思うのですが、残念ながらそういう必要度合いはあるのですが、何か特徴あることというものはい見出せない状況でございますので、いろんな角度で知恵、アドバイスをいただきながら取り組んでいきたいと思っております。先日の町内会議論でも例えば有料ゴミ袋をレジ袋と兼用している自治体があると。マイバッグを持ってレジ袋を廃止しているスーパーが大半でございますけれども、白老町でもできないかという町内会長さんから言われまして、現実的にはまちとしては難しいところはあるのですが、そういうのも一つの手かと思っております。そういう中でリサイクルの向上につながる部分も考えていかなければいけないと思っておりますので、なかなかこれはというものはございませんが考え方としてはいろいろ検討してまいりたいと考えております。

○委員長（小西秀延君） 吉谷委員。

○委員（吉谷一孝君） 先ほど言ったゴミ袋の件についてはあくまでも手法というか興味を引くものという考え方でいてもらいたいのですけれども、目標を持って町民にいつまでにどれくらいで皆さんが協力してごみの量を減らしませんかということを立てて計画的に推移を見ながら、お知らせしながらその目標に向かっていくという方法というのも一つの方法かと。やる気というか町民皆さんの協力で達成できた場合にはどういふことがあるかとかも考えながらやるもの一つの手法かと。なぜこう言うかという、一般的には興味がないというか、生活の中でリサイクル率が上がるか上がるまいがはっきり言えますけれども普通の町民には興味がないことなのです。私たちはここで議論しているから下げましょうとか上げましょうという話になりますけれども、一般の町民の方たちにはそういう意識はないです。その意識を変えるためには何か動機づけをきちんとしてリサイクル率を上げたらこういういいことがあるのだということに理解してもらわないと、このリサイクル率は上がってこないという認識があるので、そこを上げるための新しいアイデア、方法を考えて

いただければと思いますのでよろしく願いたします。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 吉谷委員のご指摘のとおり新しいアイデア、考え方というものはまだまだ今後たくさん検討の余地がありますので、いろんな角度で我々も積極的に考えていきたいと思いますが、先ほどごみ処理計画 30 ページの中にもありますが、積極的な広報、説明会の充実の部分にもつながってくるものと捉えております。リサイクル率の目標設定であつたりリサイクルの向上意識を高めることを町民の皆さんに協力を求めていかなければならないかと思っておりますし、一般の町民の皆さん方は意識が低いということは全てとは申し上げませんが 3 R の協議のメンバーさん、環境町民会議さんの中のいろんな関連団体とも連携しながら取り組んでまいりたいと思いますので引き続きよろしく願いたします。

○委員長（小西秀延君） 西田委員。

○委員（西田祐子君） 吉田委員のおっしゃっていた電動コンポストの助成が必要ではないかと思っています。これはもっとやってほしいなと思うのです。吉谷委員おっしゃっていましたが、町民にとって関心があるのはリサイクル率ではなくて、実際に我が家にあるごみをどうやって減らそうかということが関心が高いわけです。そうやってきたときに、やはり生ごみというのがコンポストをずっとやってきましたけれども最近静かになってしまったものですから、もうないのですかと町民の方から聞かれるのです。それだけ町民の方もあれからずいぶんたちますから、もう一度組み立て直していただきたいと思うのが 1 つです。もう一つ、ポスターなのですけれども、毎年ピンクかオレンジ色か黄色だったか、裏表で A 4 サイズでごみの分類と数種類書かれたのが全町配布されますよね。あれが凄く不便なのです。年を取ってくるとみんな目がわるくなります。ほぼ 100% というくらいわるいのには老眼なのです。A 4 サイズでごみの分別を見たときに正直言ってメガネかけてもよく見えないのです。字が小さいのと絵が小さいので A 3 の倍くらいの大きさにしてカラーにしてほしいくらいです。そして、裏と表が 1 枚だと張ったときに収集日見るとリサイクルのほうが見えない。皆さん若いからいいかもしれないけれども、私は年寄りと暮らしてて本当によくわかります。きょうが何日か何曜日かわからないのです、毎日が日曜日ですから大変なのです、ごみを出すというのは、本当です。ごみの収集も自分が若い頃はこうだったけれども、いま変わっているという意識も常に持ってそれを見なければいけないのだけれども、なかなか見ないという欠点もあると思うのです。もうちょっとこういうような形でキャッチフレーズなり何なり上手なものを考えていただいて町民の方々にリサイクルをうまくやってもらえるようなそういう工夫をもうちょっとしていただけないかと思います。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 電動コンポストにつきましては助成 1 万円として、電動コンポスト自体は値段が数万円単位でございまして上限で助成は今も実施しております。ただ、ご指摘のとおり周知徹底がまだ十分にできていないという現状でございまして、そのところに関しましては今後検討してまいりたいと考えていますので、予算も含めて今後もコンポスト自体の推進というこ

とで検討してまいりたいと考えております。ごみカレンダーなのですが、ご指摘のとおり私も非常に見やすいかと言ったら見づらいというところは危惧しています。可能な範囲で、どうしても以前はカラー刷りで分別に関しましては見やすくしていた時代はありましたが、予算の関係上白黒で実態として経緯は抑えてきた状況でございます。ただ、確か5年ぐらい前だと思うのですけれども、カレンダーの収集が各地域で違って、全てそれを1枚に収めていた時代もあったのですが見づらいということで最大限各地域別々にカレンダーをつくるように町内会単位で、その地区でわかりやすいように状況がございます。そのような観点で裏面の分別のほうも当然1年ですぐ変わる話ではないですから、ある程度何年か使えるような形でもう少しカラーとか予算も少し関係ありますけれども、担当課として検討しながら見やすいような形は努力してまいりたいと考えます。

○委員長（小西秀延君） 西田委員。

○委員（西田祐子君） 検討していただけるということで非常にありがたいのですが、ごみの分別ということがいかに大事かということが本来のきょうの議題の1つではないかと私は思っているのです。そここのところが町民から理解してもらって分別するということが大事なので、そこを努力するのではなくて実際にもうやらなければいけないのではないかと思っていますので、そうしないと今ある収集所のあり方、登別市に持っていくごみの量にしても減っていかないのではないかと思いますので、リサイクルの率も大事だけれどもごみの量全体を減らしていくという観点でぜひお願いしたいと思います。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 繰り返しになりますけれども、ごみ処理計画の中で先ほども言ったとおり積極的な広報の中で一つのツールとすれば西田委員お話のとおりこのごみカレンダーをもっと見やすくする。そういった徹底につながってくると思います。努力という言葉で申し上げましたが、できるところは明日からでもいろんな角度で検討していきたいという気持ちでおりますので、引き続き住民の理解をいただけるよう担当課として努力をしまいたいと思いますのでよろしくお願いたします。

○委員長（小西秀延君） 大淵委員。

○委員（大淵紀夫君） 具体的に2点くらいと考え方を聞きしたいのですが、ごみの問題というのは思想なのです。そういうことをきちんと行政側がつかまえてやると。これはどんなことをしても絶対出るわけです。考え方としてはエコリサイクルでやったところは多分将来的にはああいうふうになるでしょう。世界的にごみは燃料化されるというのは日本にも横浜とか大阪とかたくさんあります。これはそうなるっていくというのは地球全体の環境を守るということからいっても、私はそういうことを見越した考え方や自治体で政策をつくらなければだめなのです。ただ、施設のはまだ未成熟だったということ、これは事実です。もっともっと研究費があったり本来ならああいうことは大学で国がやるべき中身のものなのです。そのことが地球全体の環境を守るということになるわけでしょう。そういう視点があるかどうか。現状見たら今のような議論になるのだけれども、ごみ学という学問があるくらいだから、行政が取り組む姿勢、根本としてそういうものがないと目

先のこと、お金のことにしかならないのです。違うのです。地球全体をどう守るかという視点でこのごみという問題に取り組みないと上手くいかないではないか。それをどういうふうに全町民に徹底していくかというのは、そこが行政の政策をどうやってつくるかというのが一番大切なところではないかと思っています。根本的には押さえながら、例えば 35 年までに 30%にしたいというのであれば、今の状況で言えば具体的にいけば、例えば生ごみの割合がどれくらいなのか。一番手とり早いのは生ごみを押さえれば、それは堆肥化なのかコンポストなのか電動コンポストなのか。ある意味電動コンポストは今の情勢に合っています。庭がない家がたくさんあるとか面倒くさいから行かないとか、そういうことを解決できる中身ですから。35 年までに 30%にするためには 1 つは今の言うコンポストを含めた生ごみを減らすということ。30%に合った形で減らすということ。もう一つの伸びしろがやはり燃料ごみだと思うのです。燃料ごみの回収は 10%以上いくと思うのです。28 年で言えば 420 トン。総体のごみ量が 7,500 トンくらいだから、これは 700 トン、800 トンまで。ここで一番伸びしろがあるのはここだから、ここで伸びしろをつくる。具体的な目標を 35 年まで持って、それを町民の皆さんにわかってもらう、理解してもらうか。ごみ問題は具体的出なければだめなのです。思想なのだけれども、かけ声だけで絶対いかないのはこれです。ですから吉谷委員から出たようになるわけです。メリットが何なのかと。そののところをどういうふうにまちが政策としてつくり上げるかということです。もう一つは生協から白色トレーを回収している、あれの行き先はわかりますか。あれは絶対聞いたほうがいいです。ある市町村では、ああやって回収しているでしょう。回収して燃料ごみではなくて普通のごみとして燃やしている。回収したら格好いいでしょう。現実的には普通のごみとして燃やしてしまっている。実際そういう自治体があったのです。だからあれはうちのまちでいえば燃料ごみになるでしょう。そういうことを含めて、それを生かせる。例えば苫小牧市にサニックスエナジー、プラスチックで発電しているところあるでしょう。行き先はちゃんと白老で出たごみの責任は行って聞いてみるかと。それくらいのものがないといかないのではないかと。政策とはそういうことです。自治体自体の考え方がそういうふうになっていかないとだめではないかと。総体的にそういうふう思いながら、部分的に目標をきちんと持って具体的に進めるといふ政策が必要ではないかと思うのですけれども、どうですか。

○委員長（小西秀延君） 後藤田生活環境課主幹。

○生活環境課主幹（後藤田久雄君） 今の生ごみの割合なのですけれども、正式な数字は今持っていないのですけれども、白老にすると燃料ごみとかごみが減ってきていますので、生ごみの割合とすれば登別市のほうで可燃物として焼却処分しているのは 6、70%は生ごみ。ほとんど水分なのです。プラスチックとか燃料ごみとかそちらのほうで回収されて、油のついたものとか汚れている袋とか、そういうものも含まれているので一番大きいのはやはり生ごみの量がごみとしては多いという状況です。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 大渕委員おっしゃるとおり、今の生ごみもそうなのですが、ごみ処理計画の中でリサイクル率を 30%と目標設定している部分をいかに具現化したてつけしその手

法を町民に理解を得ながら取り組むということが行政の施策として重要なことだと考えております。しかしながらまだまだ先ほどの事務的なことを申し上げたとおり、コンポスト自体で一般家庭で消化されている量がどのくらいとか、先ほどスーパーの発泡類の行き先を含めた量がどうだという、根本的なことなのですができるところできちんと押さえて 30%につなげていくということが本来大事なことだと思いますので、これにまだまだ中間でございますので 30%まで目標設定している以上着実に進めていきたいと思っております。燃料ごみに関しましても、現状の施設の運営規模形体の中で日本製紙のほうに 29 年度 1,300 トン程度ですがやられております。いろんな余剰生成物含めて燃料ごみの拡充を入れますと、これを施設での生産とまたは先ほど苫小牧市にある発電会社等のお話もあるように、そういった受け皿、いろんな角度で模索していかなければならないかと考えております。それは燃料化施設全般的な今後のあり方にも絡んできますので深くは申し上げづらいところではありますが、今後早期な形でこういった話も町民、議会のほうにもお話をしていかなければならないかと思っておりますので、本日のテーマであります循環型社会におけます 30%につきましてはご指摘をいただいたとおりに着実に具体的にできるように町民の皆様説明をしながら目標を進めてまいりますと考えております。

○委員長（小西秀延君） 大淵委員。

○委員（大淵紀夫君） 大淵です。今話を聞いたら、これをやるには生ごみ。生ごみだけ減らさなかったら成果ないでしょう。ということは、ごみ全体量を抑える、抑えると同時につかまえということ。生ごみをコンポストでどれだけ処理されるか。エコリサイクルがあった中ではっきり言えば堆肥化はなかなか難しいと思うのです。そこを抑えたとしたらコンポストしかないのです。その量もわからなかったらだめでしょう。わかる方法があるのかどうかわからないですけども、例えば私はもう何十年もコンポストなのです。今はもちろん出る量の少ないからおですけども、けれどもごみ袋で出す燃えるごみは、燃料ごみ含めてきちんと出したらほとんどないのです。先ほど吉谷委員言ったように何が言いたいかという、それをやればごみ袋の量は減るのです。だから家庭ではそれだけ儲かるのです。これだけ儲かりますという、逆に言えば何かものを渡すということもあるけれども、ごみ袋を買わなくてもいいということもあるのです。私はそういうことを高齢者でもよくわかるような宣伝の仕方。やっとならエコリサイクルの裏にある燃料ごみを持って結構来るようになってきた。今は新聞もかなり入っています。ここは思想というのは頑固にそこをやる。生ごみ 60 を 40 にすればリサイクル率はどれくらいになるのか、そこを目指してわかるようにやると。わからなかったらどうにもならない。そういうことをやらないとこれはいけないのではないかと思うのです。建前と本音違ったらだめです。建前と本音が一緒でなかったらだめです。そういうふうにあります。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） おっしゃるとおりでございます。堆肥化をまちとして、または事業者との連携ということで言いますと、まだまだ廃棄物処理費全般、お金の話になってしまいますが、それを見極めていく中で 1 つ手法としては道内の自治体の事例もあるとおりに効果的だと考えて

おります。今後の中でごみ処理全般として検討していくべきとは考えておりますので引き続きその検証を進めてまいりたいと思っております。特にその部分でいきますと、ご指摘のとおり実際の生ごみ量がどれくらいの量があって、それを何かしらリサイクルに転換することによってリサイクル率にどれだけ跳ね返るかということも基本事項を押さえていかなければいけないと思います。ただ、難しい部分もあると思いますが、そこを見極めながら1つずつ積み上げていくことも大事だと思いますのでここもやっていきたいと思っておりますので引き続きよろしく願いいたします。

○委員長（小西秀延君） 暫時休憩をいたします。

休憩 午前11時05分

再開 午前11時15分

○委員長（小西秀延君） 休憩を閉じて会議を再開いたします。

1の白老町におけるリサイクルの現状と推移についてほかに質疑のあるはどうぞ。

吉田委員。

○委員（吉田和子君） 先ほど私も生ごみの話をしましたけれども、生ごみの割合が60%、70%と大渕委員に答えていましたけれども、バイオマス燃料化施設ができてから漁業関係とか食品関係の工場の残渣も燃料ごみになるということを出していたと思ったのですけれども、そういう事業所から出てくる生ごみはどのようになっているのか。前に事業所によっては電動の大きな生ごみ処理機をつけてきちんと堆肥化してごみを出さないようにしていることも指導として大事ではないかと話をしたことあるのですけれども、ダイエットクックも大きい工場を造りましたけれども、あそこもかなり生ごみが出てくるのではないかと思うのですが、町としての事業者への対応はどのようにされているのかというのが1つ。もう一つは先ほどから言っているように目にするということが非常に大事なことだと思うのですけれども、車で歩いているとコンポストを壊してひっくり返して捨てているようなところが結構あるのです。高齢になってやらなくなったのか使う人が居なくなったのかわからないけれども、そういったものが大変ふえてきていますし、若い人たちもどういったものがあるのかというのが状況的にわからないのではないかと思うのです。苫小牧市なのですけれども人の目につくところにコンポストと電動コンポストを展示しているのです。助成がいくらになっていて、どういう形でやるのかということ人を集まるときとか人の目につくところでやっているのです。だから、そういった工夫も1つはあるのではないかと思うのです。もう一つ、苫小牧市で何回か目にするのですけれども、苫小牧市で試験的に2カ所やっているのですけれども、リサイクル缶とかいろいろなものを場所を設定して町内会で日曜日にみんな持ってくるのです。それを今度ポイント還元しているのです。苫小牧市はリサイクル率がずっと低かったはずなのですけれども有料化と同時に凄く上がってきたのは工夫をしているのだと思うのです。いかに行政の指導とか町民会議とか3R会議の人たちの知恵を借りながらいろんなことを今後政策として打ち出していかないとバイオマスがなくなった分を何で補うかというやはり町民力だと思うのです。そういう考え方でやっていかないと思うのですが、その辺のお考えを伺っておきたいと思っております。

○委員長（小西秀延君） 後藤田生活環境課主幹。

○生活環境課主幹（後藤田久雄君） 私からポイント還元の関係なのですけれども、事業者マテックさんでやっていて古紙とか新聞紙とか古着、小型家電とかそういうものをみんなやって重量でポイントがついて還元されるというやつなのですが、実際にうちはことしから古着とか古紙、小型家電はマテックでやっているのですけれども、そちらに話は聞いたのですけれども採算が取れない、難しいという回答はもらっています。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 食品残渣の関係につきまして、今手元に量的な資料が用いてございませんので工業団地のほうは特に燃料化施設での処理はできておりませんが、おそらくここ何年かの数字はあると思いますのですが、後ほど資料をご用意させていただきたいと思います。事業者の対応に関しましては、なかなか特徴あることはできていない現状でございます。一般的に事業系一般廃棄物という捉えの中で事業所が特に新しくなったところ、最近は特段ないのですが何か分別方法が変わったりとか、または事業者さんで新しく設置されたりとか、例えば工業団地に新しく進出したとかタイミングを見計らいまして担当課と事業系に排出する方法はきちんと説明はしているのですが、その中でリサイクルに向けてという特徴あるものは特段やっておりませんので、何か事業系の中でもっともっとリサイクル率の向上、またはごみの減量化にかかれる取り組みについては一般町民に向けてと同様に検討してまいりたいと思います。コンポストの古くなって老朽化している扱いとかコンポストの若い方の取り組みなのですが、世代世代でコンポストの扱いでいきますと、きちんと管理をしなければ虫が湧いたりいろんなことがございますので、そういう部分を含めますと苫小牧市さんは先日新聞報道にもありましておおり、いろんな角度で見習うべきかと考えております。できることからなりますが考えていきたいと思ひますし、この時期特に町内パトロール、空き地、ごみステーション含めて担当が回っております。何か家庭で不要になっているようなコンポストがあればできる限り清掃指導という観点で家庭のほうにも直接お話を受けていろんな指導を行っていききたいと思ひますので引き続き対応してまいりたいと考えております。

○委員長（小西秀延君） 吉田委員。

○委員（吉田和子君） 今の環境の変化に皆さん不満を抱いているというのは、自分たちが将来の子供のためにしなければならないという考えの中にはあると思ひます。これから白老はアイヌ国立博物館もできてホテルもできるという話も出てきています。そういった情報があったときにきちんと担当課と連絡を取って、人が集まればごみが出ますから、ごみ処理のあり方についてきちんとした取り扱いを相談すると、自分たちで処理できるような方法を取ってもらえるようにつくる以前にやっていったほうがその場所をどうするかと考えるともらえると思ひますので、先に手を打っていくことが白老町の観光客を100万人迎えるというまちがごみのことで嫌な思ひをされないように、きちんとした環境を守るためにはやっているということも一つの大きな宣伝になると思ひますので、そういったことでは事業者さんの努力も今後必要ではないかと。それも指導していけるのは行政ではないかと思ひますので、そういった面では対応していくべきだと考えるのですが。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） ご指摘のとおり、特に来訪者が多くなる 2020 年に向けてさまざまな取り組みの中で環境の部分とすればごみ処理に関しましては重要と捉えております。現時点で具体的な取り組みにはなかなか進み切れてはおりませんが、一般論としても観光事業者特にごみ処理、いろんな角度で環境美化という観点は何らかの方法を用いて徹底すべきと考えておりますので、担当セクションを含めまして 2020 年に向けてできるところ関係事業者含めて取り組みを検討してまいりたいと考えております。

○委員長（小西秀延君） 前田委員。

○委員（前田博之君） リサイクルの関係でリサイクル率、今までいろいろ議論あって理解してはいますけれども、リサイクル率の出し方 27 ページにあります。ごみ処理量足す集団回収量、分子が資源化量足す集団回収量となっていますけれども、資料 1 のリサイクルの算出方法が出ているのだけれども、どれが分子でどれが分母なのか確認しておきたいのです。もう 1 点は、今までいろいろ議論出てはいますけれども、35 年までに 30% 目指しますよね。28 年度で 19.45% ですよ。30% にするためには前段の答弁あると思いますけれども、どれをふやさなければ 30% にならないのかどうか。それを整理しておきたいと思いますので、まずお願いします。

○委員長（小西秀延君） 後藤田生活環境課主幹。

○生活環境課主幹（後藤田久雄君） リサイクル率の算出方法ですけれども、ここでいう分母でいきますとごみの処理量、これと集団回収量こちらが分母になります。分子が直接資源化量と集団回収量、これも両方入ります。中間処理再生利用料と資料 1 でいきますと余剰生成物の発生量、これが分子となります。

○委員長（小西秀延君） 前田委員。

○委員（前田博之君） 30% にするにはどこをふやして対策をしなければ 30% にならないのですか。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 単純なのですけれども、ごみ処理量と言いかけても、ごみ処理量が減ることで分子をふやせば率が上がりますので、直接資源化をふやすことが数字が大きく変わってくると思います。直接資源化量です。これは今やっている瓶、缶、ペットボトル含まれてくるのですけれども、当然のことながらごみ処理量が減って資源化量がふえると率が上がりますし、集団回収量ややこしく見えるのですが、集団回収量というのは集団で回収したものがイコールなのです。ですから 100% という見なしで分母も分子も加わっているものですから、端的に言いますとどこをふやすかという資源化しつつごみを減量化すれば自ずからリサイクル率が上がるという仕組みになります。

○委員長（小西秀延君） 前田委員。

○委員（前田博之君） そのために今まで議論されていますけれども、30% にするためにはどういう対策をしなければいけないかということが議論だと思うのです。失礼ですけれども、コンポスト

なんてしています。先進的なものです。そうではなくて、ここで言ったリサイクル率の分子と分母わかりました。そのためにはごみの処理量と直接資源化するために何をしなければいけないのですか。そういう対策はここで具体的にうたっているのですか、そこを聞きたいのです。それなければ何もここで議論しても悪いのだけれども同じです。20%前後で推移していくしかないのです。そこまで担当として何をどうしなければならぬのか、町民にお願いしなければいけないし、行政もお金がかかるかどうかは別にしてそれだけやらなければいけない。これらについてはどうですか。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） なかなかご理解いただける答えにならないかもしれませんが、潜在的に一般家庭で行っていただいている分別の徹底。その資源化がはかれることによって当然ごみの減量化になってきますので、大きくは潜在的な部分をいかに目標設定に近づけるうえでこれまでご議論させていただいたとおり、周知徹底をはかっていくことがまず最大だと捉えております。または、生ごみの話も今回出ました。生ごみを実際家庭から排出したものを資源化できると。大きな割合でいきますと凄く30%、もしかすると以上になってくると思いますが、今着実にこの30%を進めていくためには26年度設定したときは正直北海道との整合性とりながら30%の目標を取ったところありますけれども、それに近づけるためにやっていくのはやはり潜在化している分別の徹底であったり、先ほど事務手続き上の話をしましたが実際資源化している各業者さんのいかにカウントできるか、そういう部分を含めて目標に近づけていくというのが今後の取り組みと考えております。

○委員長（小西秀延君） 前田委員。

○委員（前田博之君） 象徴的で非常に難しい。それをどうするかという、いろいろ提案も出てくるけれども。いろいろ議論も出てきたけれどもヨーロッパ、主にドイツも10年くらい前になるかと思う。シンクの中にごみを拡散して下水道に流してごみを減らすことがヨーロッパ、ドイツでは主なのです。多分、白老でもそういうチラシがあってやったらいいのではないかと、下水道の書類の関係か何かで結果的には消えてしまいましたけれども。今は普及されていないけれども、その辺についてはどうなっているのですか。見たのですけれども、非常に進んでいるのです。コンポストもいいですけども、あれは凄く減るのです。

○委員長（小西秀延君） 後藤田生活環境課主幹。

○生活環境課主幹（後藤田久雄君） 下水に直接流せるというプロポーザーだと思っておりますけれども、以前下水課にいたときにあったのですけれども、現在の終末処理場で対応できる処理能力がないのと配水管も細いのでプロポーザーがどんどん発達して各家庭から流れてくることになってしまうと、それはのみ込めないということもあって全部クリアしないと普及できないという問題があるのです。確かに排水のところにモーターが入っていて全部粉々にしたものを流す。要はシンクの排水する途中でモーターが入っていて生ごみを全部なげるといって、粉碎されて排水と一緒に流す。今のうちの立場でそれをやればかなりの減量になるのですけれども、それには下水処理場の問題があるのと排水管の問題があるのでクリアできないと難しい。現状の処理能力わからないですけども、当初はそういう問題があってできなかったということです。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） ただいまの件で申し上げますと、下水道に仕組みをつくるという効率性と先ほど言いましたが生ごみの堆肥化がリサイクル率に高い割合を占めているということを考えて、拠点回収の中で生ごみを集めてそれを堆肥センターをつかって効率よくやっている実体と、下水の本管から中継を伝って終末処理場まで行って最終的には脱水計器になるという仕組みは、成分は別にしましても仕組みというものはそういう流れかと。あとは、いかにそれが廃棄物処理費全般的な経費を効率的に考えた場合、どちらを選択するかという議論になると思いますので、現時点ではなかなかヨーロッパ風というところは現実的には難しいと捉えております。

○委員長（小西秀延君） 前田委員。

○委員（前田博之君） ぜひ30%に達成するためにせっきやくここで答弁ありましたけれども、具体的に何らかの対策なり具体的な計画書を作成する必要があると思います。それによって町民に周知しなければただ抽象的に話しても誰も理解できないのです。30%目標と書いてあるのですからそのために何かをするというフォロー図をつくって行政も仕掛けなければならないし、町民にも負担してもらわなければいけない。きちんとやらなければ空論に終わると思うのですがいかがでしょうか。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 計画的にということになると思いますが、このごみ処理計画も実行性のあるものという捉えですが、もう少し具現化をしなければいけないという前田委員のご指摘だと思います。先ほどから出ている話の中で例えばごみカレンダーとか詳細の部分も全てボトムアップして全体感を捉えながら町民向けに目標設定を掲げて周知することと捉えておりますので、この場でお示しできませんが早期に具現化して周知徹底を図っていきたくと考えております。

○委員長（小西秀延君） 及川副委員長。

○副委員長（及川 保君） 3点ほどお聞きしたいのですが、今回リサイクルの件なのですが、ごみ問題というのは平成の初頭からまちも議会の中でも取り組んだ経緯があるのですが、そういった中でコンポスト、燃料化施設の問題等々も出てきているのですが、私が疑問に思うのは資料1でもわかるとおり総体的にごみの量は減っていない。ところが人口はどんどん減っている。平成の初頭くらいからすると6,000人から7,000人減っているのです。こういう状況の中でごみ総量が減っていないという、この部分が疑問に感じていること、これはどういうことか説明がつくかどうか。もう一つは、生ごみも含めて登別市の管理するクリンクルセンターで処理しているのですが延命の状況含めて、今回はたまたま登別市も白老町と一緒にごみ処理をするという状況にはなっているのだけれども、将来的に見てどういう状況になっていくのか。町民もどんどん減っていく状況の中で町側はどういうふうな捉え方をして、これからリサイクルを含めて取り組んでいくのか。これは真剣なこととしてやらないと後々非常に困った状況になっていくのだと思っているので、そのあたりの考え方を含めてお聞きしたいと思います。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） ごみ処理の推移でございますが、ご指摘のとおり7,000トン台推

移しておりますが、事業系を含めて数値的には人口減少の中で家庭系のごみは減っているのは事実ですが、事業系の中で若干ふえる中でバランス的に7,000トンという状況だと。事業系一般廃棄物、産業系廃棄物ではなくて一般廃棄物の中で事業系、家庭系でございますので事業系から排出される一般廃棄物がふえているのもあって7,000トン台と捉えております。2点目の広域処理の関係でございます。これまでもお話ししているとおり、登別市との広域ごみ処理に関しましては、登別市の長寿命化計画に基づきまして平成41年まで計画されております。41年以降は今の段階ではどういう方向かは現時点ではまだまだ検討されていないのですが、登別市さんとも4月開けてからお話しして、ことしの中でまずスタート何かしら切ろうということでの話し合いをする準備として今動いているところですので、現時点では具体的なお話はできませんが当然のことながら41年の想定の中での廃棄物処理費、それぞれ登別市、白老町の費用負担の捉えの中で現状の焼却炉の耐久が重要になってくると思います。仮に延びるものなのか、だめであれば新規ということになりますし、まだまだこれからなものですから、そういうところがきちんと方向性が見えればその段階で議会、町民にもお知らせしていきたいと思っております。

○委員長（小西秀延君） 及川副委員長。

○副委員長（及川 保君） 今後のごみ処理問題、それからリサイクルの問題、非常に大事なことに繋がっていくと思うので、前田委員からもありましたけれどもしっかりと計画をつくって町民にきちんと周知をしてもらって、こういう計画をつくって取り組んでまちの大きな大事なことだと職員の皆さんも捉まえて進めていってほしいと考えます。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 本日のご議論させていただいた中のご指摘たくさんいただきました。それを踏まえまして早期に具体的な実行に取り組んでまいりたいと思いますので引き続きよろしくお願いたします。

○委員長（小西秀延君） 1番についてほかはよろしいですね。

2番に移ります。2番は北海道の計画ですが、質問のあります方はどうぞ。2番目についてはよろしいですか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

○委員長（小西秀延君） それでは、3番目の特徴ある市町村のリサイクルの状況について、こちらのご質問のある方はどうぞ。

前田委員。

○委員（前田博之君） 特徴ある部分で白老のバイオマスを先駆けてやったのですがけれども、それが失敗に終わったのだけれども、富良野市が逆に失敗の経験をもとに再分類して生ごみを堆肥化したのです。現実的にあそこは農業が多いから堆肥化して農家に配布しているのだけれども、白老として富良野市の参考にならないのかどうか、皆さん現場視察しているかどうかわからないけれども、その辺の見解だけお聞きしておきます。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 確かに堆肥化に関しましては、富良野市以外にも地域性の特徴を活かして取り組まれている。いかに白老町に適用できるかどうか、まだ見極めができないところなのですが、事業系一般でいきますと、特には和牛生産が多いところで家畜排せつ物がございまして、それらは実際のところ個別に共同堆肥舎があったりとか、企業は大型堆肥処理機を入れたりしている状況もありまして、それが白老町として集約できるかどうかという、なかなか現時点でスピード感考えますと燃料化施設の課題があつて同時進行がしづらい状況がございまして。うまくそれが軌道に乗るような部分、または共同で取り組むようなことがあれば着実に何か進められると思うのですが、現時点で考え方としては前にもお話ししたとおり、お話としては我々も同様なのですが、現実的にタイミングを含める時点では難しいという捉えでございまして。私も富良野市若干調べておりますが、非常に取り組まれておりますし、参考になるのはごみ処理カレンダーも観光客様に多言語化しています。そういった部分も見習うべきかと思っております。現実的に白老町もそういうところをやっつけていかなければいけないと思っておりますので、説明会も定期的に20数カ所年間通してやられておりますので、本当に見習うべきかと思っておりますので参考にしたいと考えております。

○委員長（小西秀延君） 西田委員。

○委員（西田祐子君） 特徴ある市町村の現状ということなのですが、白老に白老油脂さんという油を回収してやっている所がありますけれども、これもリサイクルだと思うのですが、その現状と、町民に対してもそちらのリサイクルに対しての町としてどのような働きかけをしているのか、今後考えがあるのかその辺をお聞きしたいと思っております。私はきちんとしたほうが良いと思っております。石山工業団地のところは最近随分ドラム缶もふえてきている。一生懸命やっつけていっちゃうと思うのですが、正直言ってよく内容もわからないしその辺どうなのでしょう。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） BDF（バイオディーゼル）燃料を生産している白老油脂さんなのですが、計画値、数量的なものは用いていないものですから的確ではないのですが、スタート地点からBDF（バイオディーゼル）燃料自体いろんな問題がありその研究を重ねて当時のバイオマス燃料、BDF（バイオディーゼル）燃料自体の事業者が多かったところを生き延びて実際に製品をつくっているところなんです。実際道南地区が中心だと思うのですが、ハウス栽培の代替燃料とかカキ栽培、あとは漁船などの燃料の利用もあつて、当時から残念ながら白老町の中で燃料の活用というのはなかなかふえていない現状でございまして。回収におきましては、拠点としまして公共施設等で置いていて、白老油脂さんがまとまった段階では回収している現状ではあるのですが、先ほど同様拠点回収の周知徹底が不十分というところはいなめないこともありますので、今後そういう部分も全体を捉えながら周知徹底をかけてまいりたいと考えております。

○委員長（小西秀延君） 4番に入ります。今後の取り組みと展望についてですが、1番から関連してやってきましたが、何かあれば皆さんからご意見どうぞ。

前田委員。

○委員（前田博之君） 15 ページ に最終処分あります。聞きたいのは、ここに書いてあるように環境衛生センターの処分場がいっぱいになりましたと。議会ではかさ上げや新設をしないで民間に処分を委託すると、そこまでは理解しました。その後議会の中で説明はないのだけれども、民間のほうに競争入札したのか見積り合せしたのかわからないけれどもやってもう民間で処分していますよね。その経緯がわからないのです。どれだけ量が出ているのか、関係者がいるからあまり一般質問したくなかった。どういう選考をして、どこに決まって、単価いくらで、いつからやって、1年でどれだけのごみが行っているのか、町がどれだけ経費を出しているのか、それをペーパーで資料を作成して提出してほしいのです。資料ないと思うので、それをお願いしたいのですが委員長いかがですか。

○委員長（小西秀延君） 時間的にもよると思いますが、まだ次回の日程を決めていないものから本間課長その辺どうでしょうか。

本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 経過のほうをもう少しきちんと確認してからお答えすべきなのですが、広域処理を平成 26 年から一部と言っていますが可燃ごみを広域処理にシフトした段階で焼却灰が発生します。その焼却灰が発生する量を想定した場合に、元々最終処分場がいっぱいになる状況があったものですからかさ上げする工事の費用を鑑みましてやはり現実的には厳しいという中で産廃業者さんのほうに合わせとして。26 年からだと思うのですがきちんとした数量と資料を後日提出させていただきたいと思います。

○委員長（小西秀延君） 確認も含めてございますか。

吉田委員。

○委員（吉田和子君） きょう午後から町民活動サポートセンターと懇談があるのですが、それを見ていて町民会議が町民活動サポートセンターのほうに入って活動をしているのです。環境町民会議をつくるときに、これからそういったときに分別とかいろんなことを先陣をきって事業者も全部入っているはずですから企業も含めた活動を、町民を代表して今後どう町民に知らしめていくか、基本になる町民会議を設置してはどうかということで記憶があるのですけれども、サポートセンターに行って研修をやったりとかいろいろのことをやっているみたいなのですけれども、どうして生活環境課から離れたのか。生活環境課の中であって町民の声とか企業の問題点をきちんと掌握して、先ほど言ったりサイクルを進めていくにしても分別を進めていくにしても先導していける立場の会議にしていくべきだという捉え方をしていたのですけれども、午後からあるからその人たちに聞くわけにはいかないのか、どうして生活環境課にないのかと思ったものですから、なぜそっちへ行ってしまったのか教えてください。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） 環境町民会議に関しましては、設立当初から町連合さんとの連携の中で生活環境課が所管として取り組んでおりまして、これまで町連合とサポートセンターの位置づけ体系化の整理でいきますと、いろいろ事務局の所管がそれぞれの組織の中で若干変更は伴います

が、いずれにしても生活環境課が所管として定例会議含めて参加 させていただいて各事業の検討とか、白老町としての役割、指導範疇を含めまして取り組んでいる実態です。ただ、もっともっと我々行政として支援をしていく立場ではありますので、その辺の充足度が低いと言われればまだまだこれから強化していくということになりますので、今週全体会もごございますので改めて私も年度がわりでありますのできちんと位置づけを示して取り組んでまいりたいと考えております。

○委員長（小西秀延君） 吉田委員。

○委員（吉田和子君） 環境町民会議というのは、今後の本当にごみ問題を考えたときに、環境を考えていくときに大変大きな存在になると捉えていたのです。活動内容も先ほど少し見ましたけれども視察をしているとか新聞も出しているみたいですがけれども、町民にそれが生きたものになっているのかどうか、今後の活動の見直しをすると海岸のごみ拾いとかしているということなのですけれども、それが目的ではないというふうに思っています。町民に声をかけて企業の関係者も入ってくればそれでいいと思って、環境町民会議のメンバーというのは今後のごみ減量化、リサイクル率の向上それから町民を巻き込んだゴミ処理のあり方、そういったことに知恵を絞ってもらえるような組織体であってほしいと思っているものですから、今後の活動のあり方の中でしっかり生活環境課として目的を明確にしてやってもらいたいと思いますけれども。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） おっしゃるとおりで、基本的な事項はぶれずに取り組んでいきますし、取り組み手法がいかにか効果的にやっていくことが大事だと思っております。町内での講演会であったり以前ですと北海道ゼロ・エミ大賞というのを持っていて、道内の施設を当時福祉バスがあったときにバス1台お借りして視察も行った時代もございます。お金のかけ方というところも当時はあったのですけれども、町民関係者そういう取り組み、先進的事例を見ることも意識の向上となりますのでいろんな角度で検討していきたいと考えております。

○委員長（小西秀延君） 最後私からなのですが、生ごみの関係がこれからどうしていくかというのがパーセンテージでいってもかなり大きいということでしたので、前田委員からも出ていた富良野市の例もあるように堆肥化というのが登別市のクリンクルセンターの関係もありますけれども、今後大きな政策として展開していくときに堆肥化というのはどういうものなのか。費用対効果も大まかなでも構わないので調査をしておかないといけないと思っています。それを課も推進していただきたいと思うのですが、その展望はどうでしょうか。調査段階で構わないと思いますので。

○委員長（小西秀延君） 本間生活環境課長。

○生活環境課長（本間 力君） ご指摘のとおり、可能な範囲で先進事例の費用対効果はある程度情報収集して資料を作成していきたいと思っています。我々担当課としてもリサイクル率を向上するうえでできれば資料を作成していきたいと思っています。担当課としてもリサイクル率を向上するうえでいまの委員長のお話が重要だと思っております。いかに適用できるかどうかも含めて検討してまいりたいと思いますのでよろしくお願いたします。

○委員長（小西秀延君） 本日の所管事務調査は以上をもって終了したいと思います。意見出し等をお願いしたいと思いますので日程が決まりましたら別途また皆様に改めてご案内を差し上げたいと思います。全般意見出しする前に新しい資料の説明だけお願いしておきたいと思います。それによろしいでしょうか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

◎閉会の宣告

○委員長（小西秀延君） 以上をもって総務文教常任委員会を閉会いたします。

（午後 0時 5分）